

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320001

研究課題名(和文) 自然観の展開と人間的営為の運命に関する思想史的・応用倫理学的研究

研究課題名(英文) Studies in Conceptions of Nature, Fate and Humanity

研究代表者

座小田 豊 (ZAKOTA, Yutaka)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・総長特命教授

研究者番号：20125579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人間観と自然観との相互関係と変遷を辿り、その成果を、科学技術論や、農村・都市についての実証研究や人文地理学と照らし合わせ、自然と人間社会を考える新しいモデルを獲得することを目的とした。

古代ギリシアから現代にまで至る「自然」概念の変遷の研究、運命論や天罰論の分析、トランス・サイエンス概念や技術概念の分析、自然観の国際比較や東北観の経年比較といった点について、多様な成果を挙げることができた。以上の成果は、座小田豊(編)『自然観の変遷と人間の運命』(東北大学出版会、2015年)としてまとめられている。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to propose a new model of understanding a complex relationship between nature and human society. Our method is threefold: (1) philosophical study on a history of the concept of nature; (2) science and technology studies; (3) human geography. First, we analysed the concept of nature in Aristotle, Descartes, Hegel, Husserl, Heidegger and Blumenberg, as well as the concepts of fate and divine punishment. Secondly, we did two critical studies of Weinberg's concept of trans-science and Habermas' concept of technology. And thirdly, we analysed differences in the concept of nature between many cultures and generations. These studies are published in Yutaka Zakota (ed.), Studies in Conceptions of Nature, Fate and Humanity (Tohoku University Press, 2015).

研究分野：ドイツ観念論を中心とした哲学・倫理学

キーワード：自然観 運命論 天罰論 科学技術社会論 技術の哲学 東北地方

1. 研究開始当初の背景

現代の状況は、人間と自然の関係についての再考を私たちに迫っている。先般の東北地方太平洋沖地震とそれに引き続く東日本大震災は、その必要性を改めて浮き彫りにするものであった。そしてその「必要性」は、大きく以下の三点にまとめることができる。

(1) 思想史 主に近代科学に基づくと見える私たちの自然観も、実は(自然=コスモスの中での人間の地位をめぐる)人間観の展開との複雑な混交・緊張関係の中で形成されてきた。この混交・緊張関係を通じた自然・人間観の生成過程の研究は、今日的な問題を考える上で重要な思想的基盤となるが、多くの先行研究がどれも主に革命的時代である16・17世紀を扱うため、他の時代の研究は乏しい。また、この関係を「運命」に注目して迎えるという視点は、古臭い外見や天譴論との混同ゆえか、既存の研究には欠けてきた。

(2) 科学・技術の哲学 自然と人間の混交・緊張関係を具体的かつ包括的に捉える歴史的・理論的視座を私たちは欠いており、このことこそが、いま科学や技術をめぐって噴出している諸問題の一因である。このことは、例えば原子力や今後の発電のあり方をめぐる問題において明らかであろう。

(3) 現代日本の都市・農村研究 この混交・緊張関係は現代の都市・農村像にも大きく関わっている。例えば過日の大震災は、東北地方が「美しい水田の広がる自然豊かな農村」であるだけでなく(もちろんこの「自然」の実情は「人の手が入った自然」である)「日本のものづくりの基地」であり「電力の供給源」でもあるという、これまで十分には意識されてこなかった事実を明らかにした。震災後の東北地方のあり方、延いては日本のあり方を構想するためには、このイメージにおける混交と緊張の具体相を、都市地理学や農業経済学の観点から多角的に分析する必要がある。

2. 研究の目的

人間は自然の一部にして自然を超えたものとして自らを思い描くが、この二側面は常に複雑な混交・緊張関係にある。例えば科学や文明は自然を超えてその征服を試みる自由の現れだが(緊張)、自然と関わりその恩恵を受ける中で発展したものであり(混交)、科学が引き起こす自然破壊(緊張)を前にして自然保護が目指す「自然」は、実は既に人間の手が入った自然に他ならない(混交)。指摘されて久しいこの混交と緊張(自然災害等が人間の存立を脅かす時、これは「運命」の語の下に先鋭に意識される)を考える新しいモデルの提示が、いま喫緊の課題である。この全体構想の下、本研究は、(1)人間・自然観の変遷をその混交と緊張(とりわけ「運命」との対峙)に即して辿り、その成果を(2)科学技術論や環境倫理、さらに

は(3)農村・都市の実証研究と照らし合わせ、自然と人間社会を考える新しいモデルを獲得することを目的とする。

3. 研究の方法

上記の研究目的に対応して、研究分担者を(1)思想史グループ、(2)科学技術論グループ、(3)都市・農村研究グループに分けた。

(1)の思想史グループは、相互に過去の研究蓄積を持ち寄りつつ、(3)による問題提起に基づいて主題の精緻化を図り、研究を進める。

(2)の科学技術論・環境倫理グループの最終目標は「自然環境について討議するためのモデルの構築」である。それゆえ、原子力における科学技術の問題や、(3)の研究から提示される問題を見据えながら、過去の研究の成果である「科学的合理性についての討議倫理モデル」の理論的な再検討を行う。このモデル自体は汎用性が高いものだが、そのつどの複雑な問題に応じるためには、現場に応じてあらたに組み直されるべきだからである。

(3)の都市・農村研究グループは、地域イメージや地方経済(とりわけ「自然」の経済的な利用)についての先行研究を、一般的なものと東北地方に限定したものの両面から調査することで、「東北とその自然」についてのイメージの変遷やその現状を明らかにする。また、そのイメージの妥当性を検証した上で、最終目標の「自然の中にある人間社会の新しいモデル」をにらみつつ、重点的に取り組むべき問題をできるかぎり明確に取り出すことを目指す。

それぞれの取り組みを、各グループで随時集約した上で定期的に持ち寄り、他のグループでなされていることの情報を共有しあうとともに、相互に意見を出し合い、議論の精度を高めるとともに全体としての連携を緊密に保つことを心掛けた。

4. 研究成果

研究成果は、研究代表者を編者とする論文集『自然観の変遷と人間の運命』(東北大学出版会、2015年)にまとめられた。この論集には、研究代表者・分担者の計14名のうち、11名が参加している。以下、それぞれの論文について概要を述べる。

篠澤和久は、「アリストテレスの無抑制論をめぐる素描的考察 ピュシスとノモスの視点から」と題した論考において、「意志の弱さ」ないし「無抑制」という名のもとに古くから知られている難問に取り組み、まさにこの問題のうちで、ピュシス(自然ないし本性)とノモス(法)という二つの概念が交差する様子を具体的に描き出した。

村山達也は、「明証性と価値判断 デカルトの倫理学をめぐって」と題した論考において、デカルト倫理学の平板さが、理性

による明晰判明知を真なる認識の唯一可能なあり方としたデカルトの認識論に由来することを、「真なる価値判断はいかにして可能か」という問題と関係させつつ明らかにした。

座小田豊は、「ふるさと」としての「自然」の根源性についてヘーゲルの「イェーナ自然哲学」構想を手掛かりに」と題した論考において、「ふるさと」と「自然」という二つの言葉・概念を導きの糸として、次のことを明らかにした。すなわち、自然を、精神が生成する、いわば媒介的手段と見るヘーゲルの哲学体系の祖型に、自然と精神との根源的な同一性と、自然の第一次性の思想が胚胎していた、ということである。

小熊正久は、「人間にとっての地球の意味 フッサルとブルーメンベルクによる考察」と題した論考において、フッサルとブルーメンベルクとの地球概念を、「不動の地球」や「屈地性」、「基盤としての地球」といった鍵語を取り上げつつ論じ、両者の観点がさまざまな論点において相補的なものとなっていることを明らかにした。

佐藤透は、「運命論的語りの構造に関する試論」と題した論考において、主にジンメルを手掛かりにしつつ運命概念についての分析を行なった。佐藤は、まずは「理論的構築物としての運命論」「生活世界的な運命論」「運命論的語り」の三つを区別した上で、最後の「運命論的語り」について集中的に考察し、その基礎的特性として「行為選択に関する可能的煩悶からの解放」があることを明らかにした。

後藤嘉也は、「無意味な自然における意味の誕生 (脱)人間中心主義をめぐる」と題した論考において、ブルーメンベルク、アーレント、ハイデガー、レヴィナスなどの議論を手掛かりとしつつ、「他者が、あるいは他なるものが私に隠れながら立ち現われて要求し、これに私が応えようとするときにはじめて、意味が誕生する」というテーゼを提示し、その具体的な意味について論じた。

荻原理は、「天罰論をめぐる」と題した論考において、天罰論およびこれをめぐる言説や態度について論じ、信仰をもたない人文学者が天罰論の意義を語ることには何の意義もないということ、道徳の名のもとに天罰論の発言を禁じることはできないことについて論じたあと、宗教リテラシーの教育がもちうる一定の意義について論じた。

原塑は、「トランス・サイエンス概念と科学技術的意思決定への市民参加」と題した論考において、科学的知識を参照することが不可欠な種類の政策的意決定において、市民参加が正当化されるか、という問題を論じた。そして、その種の市民参加を、科学的知識の不確実性にもとづいて正当化することは難しいこと、ただしそのことは市民参加の必要性一般を否定するものではないこと、を

明らかにした。

長谷部正(他、五名)は、「自然観の多様性と変化 国際比較調査を通して」と題した論考において、日本・アメリカ・中国・韓国の四か国を対象に行なった自然観調査の結果に基づき、現在において自然の倫理の多様性がどの程度保たれているか、また、どのような要因がこうした多様性維持に寄与しているかを調査・考察した。

日野正輝は、「東北地方のイメージの変化 中学社会科教科書を資料にして」と題した論考において、東北地方のイメージの変化がいつごろ起こったか、またその要因と考えられる事象は何であったかを、中学社会科地理的分野の教科書における東北地方の記述の変遷を辿ることで検証した。

直江清隆は、「自然という「他者」と技術的行為」と題した論考において、技術的行為のあり方、人工物の媒介について再考した上で、マルクーゼとハーバースの論争や、マルクーゼを継承したフィンバークの考察を手掛かりとしつつ、自然を「他者」として認めることは可能か、という問いについての考察を行なった。

あらためて繰り返しておくならば、本研究は2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故によって引き起こされた深刻な事態を前にして、そこに起因する諸問題にどのように対応できるのかという観点から企図されたものである。何よりも、東日本大震災という自然災害と、人間の営みの粋とも謳われていた原子力発電がもたらした未曾有の人災とに直面して、いま何をすべきなのか、そして何が考えられるのか、が大きな課題として私たちに課せられていると思われたからである。こうした問いに対する何らかの手掛りを求めて議論を重ねてきた私たちの三年間の成果の一端が、以上の諸論考である。もちろん、最終的な解決策を提示できようはずもない。さりながら、困惑のなかにとどまり続けるわけにもいかず、いささかなりといえども、努力を積み重ねなくてはならない。本研究がその一石たりえ、また、ここから今後の「人間の営み」について何からの示唆を得ていただけるなら、これに勝る喜びはない。

なお、研究代表者・分担者たちによる定期的な研究会のほかにも、国内外から多くの人を招き、研究会と講演会をたびたび開催した。具体的には、日本人による講演会を三回、外国人による講演会を三回、日本人によるシンポジウムを一回、関連書籍の合評会を三回開催した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計37件)

座小田 豊、承認と労働 ヘーゲルの

イエーナ『精神哲学』における「媒語」の意義について、ヨーロッパ研究、査読無、vol. 10, 2015, pp. 51-74

篠澤 和久、『ニコマコス倫理学』におけるピュシスとノモス、ヨーロッパ研究、査読無、vol. 10, 2015, pp. 1-24

長谷部 正、技術の視点からみた農業と工業の類似と差異、農業と経済、査読無、vol. 81-3, 2015, 46-54

座小田 豊、無限性と否定性 ヘーゲルのイエーナ体系構想における「精神哲学」の成立、思索、査読無、vol. 47, 2014, pp. 1-25

後藤 嘉也、到来しつつある世界、あるいは絆を欠いた共同体、思索、査読無、vol. 47, 2014, pp. 95-116

長谷部 正、総ふるさと化の意味すること 小林秀雄の「故郷を失った文学」の現代的意義、農業経済研究報告、査読無、vol. 45, 2014, pp. 16-27

RAMDANI, Fatwa, and HINO, Masateru, Oil Palm Plantation Sustainable Management Model: A Community-Based Cooperative, Science Reports of Tohoku University 7th Series (Geography), 査読無, vol. 60-1, 2013, pp. 1-25

後藤 嘉也、アレーティアから公共空間へ、Heidegger-Forum、査読有、vol. 7, 2013, pp. 90-101

MASATERU, Hino, Individual-city-centered networks for cities' self-sustainability: Lesson from the Great East Japan Earthquake, Science Reports of Tohoku University 7th Series (Geography), 査読無, vol. 59, 2013, pp. 1-12

小林 睦、人間と動物 世界に棲まうことの意味、思索、査読有、vol. 45-2, 2012, 233-256

村山 達也、儂さと空しさと満たされなさ 人生の意味と死の関係についてのごく部分的な考察、東北哲学会年報、査読有、vol 28, 2012, pp. 1-13

小山田 晋、長谷部 正、木谷 忍、安江 紘幸、伊藤 まき子、東日本大震災被災地復興に対するよそ者の関わり方に関する倫理学的研究、農業経済研究報告、査読有、vol. 43, 2012, pp. 15-36

小熊 正久、ブルーメンベルク著『コペルニクス的宇宙の生成』最終章の含意、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、査読有、vol. 9, 2012, pp. 69-82

〔学会発表〕(計43件)

篠澤 和久、「津波てんでんこ」における自然と運命の一断面、応用哲学会、2015年4月25日、東北大学(宮城県仙台市)

荻原 理、地震などによる災害を天罰とみる見方について、応用哲学会、2015年4月25日、東北大学(宮城県仙台市)

原 塑、トランス・サイエンス概念と対話型科学コミュニケーション、応用哲学会、2015年4月25日、東北大学(宮城県仙台市)

直江 清隆、技術と「他なる自然」、応用哲学会、2015年4月25日、東北大学(宮城県仙台市)

野家 啓一、科学史・科学哲学と物理、日本物理学会、2015年3月21日、早稲田大学(東京都新宿区)

日野 正輝、中学社会科教科書から見た東北地方のイメージの変化、人文地理学会、2014年11月8日、広島大学(広島県広島市)

小山田 晋、長谷部 正、平口 嘉典、変容する地域社会における黒川能維持の方向性 質的データを用いた黒川の維持モデルの構成、東北農業経済学会、2014年8月27日、岩手大学(岩手県盛岡市)

NOE, Keiichi, Science and Technology after 3.11, International Innovation Workshop on Tsunami, 20/10/2014, Chamonix (France)

長谷部 正、風景評価に関する哲学と経済学の総合化に向けて、日本農業経済学会、2014年4月30日、神戸大学(兵庫県神戸市)

HASEGAWA, Koichi, Toward a Real Sustainable Future: Learning from the Great East Japan Earthquake, Asia Pacific Sociological Conference 2014, 15/2/2014, Chiang Mai University (Thailand)

原 塑、トランスサイエンスとは何か、

科学コミュニケーション研究会、2013年7月23日、東京大学(東京都文京区)

佐藤 透、原子力時代における科学者の倫理的責任 J. フォージ『科学者の倫理的責任』を中心に、岩手哲学会、2013年7月20日、岩手大学(岩手県盛岡市)

原 壘、トランスサイエンスという概念と東日本大震災、科学技術社会論学会、2012年6月16日、東京工業大学(東京都目黒区)

野家 啓一、3.11以降の科学技術と人間、総合人間学会、2012年5月26日、日本大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計23件)

座小田 豊(編著)、自然観の変遷と人間の運命、東北大学出版会、2015年、303頁

座小田 豊、栗原 隆(編著)、生の倫理と世界の論理、東北大学出版会、2015年、354頁

座小田 豊、田中 克、川崎一朗、防災と復興の知 3.11以降を生きる、東京大学出版会、2014年、80頁

戸島 貴代志、他、「地域」再考 復興の可能性を求めて、東北大学出版会、2014年、191頁(うち pp. 155-191)

吉野 博、日野 正輝(編著)、今を生きる 東日本大震災から明日へ! 復興と再生への提言 5 自然と科学、東北大学出版会、2013年、354頁(うち pp. 319-330)

直江 清隆、越智 貢(編著)高校倫理からの哲学 別巻 災害に向きあう、岩波書店、2012年、302頁(うち pp. 219-240, 257-275)

6. 研究組織

(1)研究代表者

座小田 豊(ZAKOTA, Yutaka)
東北大学・高度教養教育・学生支援機構・
総長特命教授
研究者番号: 20125579

(2)研究分担者

荻原 理(OGIHARA, Satoshi)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 00344630

小熊 正久(OGUMA, Masahisa)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 30133911

後藤 嘉也(GOTO, Yoshiya)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 50153771

佐藤 透(SATO, Toru)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号: 60222014

篠澤和久(SHINOZAWA, Kazuhisa)
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号: 20211956

戸島 貴代志(TOSHIMA, Kiyoshi)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 90270256

直江 清隆(NAOE, Kiyotaka)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 30312169

野家 啓一(NOE, Keiichi)
東北大学・高度教養教育・学生支援機構・
総長特命教授
研究者番号: 40103220

小林 睦(KOBAYASHI, Mutsumi)
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号: 20291703

長谷部 正(HASEBE, Tadashi)
東北大学・大学院農学研究科・教授
研究者番号: 10125635

原 壘(HARA, Saku)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 70463891

日野 正輝(HINO, Masateru)
東北大学・大学院理学研究科・教授
研究者番号: 30156608

村山 達也(MURAYAMA, Tatsuya)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 50596161

(3)連携研究者

長谷川 公一(HASEGAWA, Koichi)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 00164814